

ナラティブとナラティブの接続に関する研究

——明治時代の「不幸」に関する投書を事例として——

関西学院大学 矢崎千華

1 目的

本報告の目的は、個人の発信するナラティブがどのようにして他者のナラティブに接続されるのか、その言語編成を明らかにすることである。とくに、「不幸」に関するナラティブに注目する。本来、「不幸」とは比較不可能なものであるはずである。確かに、「不幸」にはさまざまな種類や程度があるように感じられる。近しい人の死、経済的な問題、病気…。しかしながら、父の死と兄の死のどちらが「より不幸」であるかを比較することは不可能であるし、家族の死と経済的困窮を比較することも不可能である。にもかかわらず、人びとは自身にふりかかった「不幸」を他人と比べる。そして、自身の方が「より不幸」であることを主張する。このことから、比較不可能なはずの「不幸」がある仕組み——特徴的な言語編成——を通じて可能になっているということが考えられる。その仕組みを明らかにすることが本報告の最終的な目的である。「不幸」を扱った研究の代表として見田(1965)の「不幸の諸類型」を挙げることができる。それに対して、本報告は「不幸の内容」を類型化するのではなく、「不幸」のナラティブが接続する際の言語編成を分析し「不幸」が語られるその形式自体を明らかにしていくものである。

2 方法

そこで、データとして明治時代の後期(30~40年代)の雑誌上に掲載されている投書を用いる。とくに、誌面上の投書者間でやりとりが確認される「不幸」に関する記述に着目する。そして、各投書の言語編成を分析し、①「不幸」であることが主張される言語編成、②「より不幸」であることが主張される言語編成、の2つを確認し、②の「より不幸」である言語編成がどのようにして先行する①のナラティブと接続しているのかを明らかにする。

3 結果

分析の結果、先行するナラティブとの結節点は「不幸」であり、その記述は本来不可能であるはずの「不幸の比較」により成立していることが明らかになった。「不幸」は個別具体的なものとして語ることは可能でも、共通の基準——例えば「絶対的不幸」のような——を参照することにより語ることは不可能である。にもかかわらず、ある基準を参照しているかのような「不幸の比較」という行為が可能であるかのように見える。

4 結論

以上から、ナラティブとナラティブの結節点は「不幸」にあることを指摘しうる。「不幸」がある特定の言語編成を通じて表象されることによりナラティブの接続は可能になっている。そして、その接続は、本来不可能であるはずの「不幸の比較」という言語的实践により可能になっているのである。

そもそも、ナラティブは「われわれの生きる現実を組織化するためのひとつの重要な形式である」。(野口 2005 : 6)。このことから考えられることは、人びとが「不幸」を語ることで自体に意味があるということである。人びとが自身の状況について語るのには、読者という他者に理解してもらおうという以上に投書者自身が自己の置かれている現実を理解する助けになるからである。明治時代の「不幸」に関する語りを分析することで、人びとがどのように社会変動という「現実」を組織化していたのかが明らかになる。

【参考文献】 見田宗介、1965、『現代日本の精神構造』弘文堂。

野口裕二、2005、『ナラティブの臨床社会学』勁草書房。